

風 狂

第67号

風 狂 の 会



【詩】

とんかつ	出雲 筑三
追い焚き	原 詩夏至
なんのために	さとう のりお
新たな出発のために	高村 昌憲
志炫さん 卒業	高 裕香
旅 人	長尾 雅樹
如 月	富永 たか子
廃屋に庭／残された羽	なべくら ますみ

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（五十一）	三浦 逸雄
--------------	-------

【エッセイ】

自分の死を創造しよう	神宮 清志
昭和は遠くなりにはけり？（10）	高島 りみこ

【童 話】

パンケとペンケ（9）	宿谷 志郎
------------	-------

【翻 訳】

アラン『芸術論集』（六）	高村 昌憲 訳
--------------	---------

執筆者のプロフィール（五十音順）

いつもの店まで遠まわり
いつものとんかつ定食
いつもの席にすわる

待つあいだ
スポーツ新聞を手にする
読むふりをして心の準備

音楽が始まった
静かな心地よいリズム
朝の光さす森に響く鼓

メインディッシュが来る前に
きっちり登る赤だしの湯気
新聞はさっと畳んで元に戻してある

急いで 箸をもつ
お待ちかね がきた
ちょうどいい油加減だ

山盛りのしゃきしゃきキャベツ
甘いつ 思わず
噛むのを止め また噛む

伊達政宗はどんなに
つたない料理でも
不味い表情はしなかったという

特製辛子をちょこんとつける
政宗さまだったら
どんな独眼をするだろうか

気を配りながら少しのソースをかけ

いつも一気に無言で食う

いつもパセリの芯だけ残す

何か大事なものを置き忘れて
満座の前
土下座をする
――冷たいリノリウムに。

気づけば
それは
酔い覚ましの独りの湯船で見た
うたた寝の
寒夜の夢だったが.....。

壁のパネルの
「追い焚き」ボタンを押し
おまえは検索する
――今度は意志的に。

忘れ去られ
今も裸で土下座をしている
おまえの
いちばん大事なもの
そのありかを.....。

神から永遠に消える事のない火を盗んだことへの怒りか
それは人にだけ向けられたものではなかった
我先にと逃げ出した主人に見捨てられた犬、猫、鶏、豚、牛

牛の「フク」は仲間と牧舎から外に出た
毒の霧雨を浴びながら
毒を浴びた草を自由に食った
解放されたこの感覚はなんだろう

しかし飼い慣らされてきた歪みが少しずつフクの体力を奪っていく

仲間とはぐれ ヨロヨロ彷徨っていたとき
原野の彼方に見覚えのある薄灯り
知らない人間が立っていた
どうしてなのか恐がらずに近づいていくフク

果してその人はフクの頭を撫でながら
干し草の上に彼女を寝かせた
「希望の牧場」と呼ばれたそこは
彼女にとっていままでにない幸せな居場所だった

しかし神の妬みは容赦ない
まず右後足が壊死した
手術でなんとか一命は取り止めた
しかし今度は庇った左足をやられた
苦痛にのたうち回る彼女を
人間達は見ている事ができなかった

人に喰われるために生まれてきた宿命を逃れたけれど
安楽死はどんな気分なんだい
神は一度も君に近づこうとしなかったね

誰かが言っていたように
神は苦痛を測るためのメジャーでしかないのか

悪という概念を知らない君がとてつもなくきつい一生を
送らなければならない理由はなんだ

あいつに聞いたって
どうせ寝たふりをしてただけだな

水平線が直線でないことは知っていても
砂浜に立って実際に海と空の景色を見る
両目だけで直線を信じて見ようとしても
地球の形がどうしても思い出されてくる

人間を見る時も水平線のように見ないか？
年齢や学歴や職業や住所などを思い出す
それらはその人間にとっての直線なのか？
そうではないと詩人なら毅然と言い出す

年齢は直線でないと婚約者も言うだろう
学歴も直線でないと人事担当者は言った
職業も同じように直線にならないだろう
社会人として生きてきた苦労人は言った

ところで住所にも直線は殆どないだろう
ところが故郷への愛着には何かないのか？
現代は何処に住もうが自由なはずだろう
でも長く暮らした土地に直線を見ないか？

砂浜に立ち地球の形を思い出さずに見ろ
太古の昔から存在している精神が見える
自らの手が届く記憶となった対象を見ろ
貧相な虚栄を捨てれば直線が見えてくる

2020年2月1日（土）

高等部 卒業式

十二年間の学びを終え旅立つ。

昨年末 挨拶に来た。

「高麗大学に行くことになりました。」

「今まで、ありがとうございます。」

「大学が決まってからアルバイトをしました。」

「初給料で買ったハンドクリームです」。

もったいなく、未だにつけられずにいる。

式場の後ろから、

志炫さんをずっと見ていた。

小学3年の時の幼顔が浮かぶ。

辛くて涙が出る時もあったね。

でも、最後まで頑張り通したよ。

大丈夫！ 勇気を出して前進です。

校長先生から卒業証書授与。

壇上の下でお母さんが待っている。

親子で抱き合い、お母さんに手紙を渡す。

お祝いにもらった花束と

卒業証書を手に、

父母と共に、最後の校門を晴れやかに後にした。

待つだけ待つ夢を食ろう
過ぎた日の花の色を目録に印して
歩いた距離だけの万華鏡を数えてみる
容易ではなかった
砂丘も橋上もアスファルトの道も草原も
通過する前方から後方へ流れて
今安眠の場所を得て
ここは全てを許せる大地なのだが
旅人は布をめくりながら考えている

何処まで行けば良いのかと
歩き疲れた旅人は
長い道のりを測りながら
暗い大地に座り寝転び
目頭を布で覆って
遠くからの薄明の光を遮っている
闇の深さは知る由もなく
ただひたすらに眠りにつこうとする
歩き続けた距離は肉体が知っている

大地は語ることをしない
淡い光は虹を写すことをしない
流浪の歳月を空白のスクリーンに写し
放浪の異郷を胸裡に埋めながら
今はただ貪るように疲労困憊の体を休めて
大地の声は聞こえない

瞑目して運命の蝶番を布に隠し
腕を投げ出し或いは腕を組み
未来の行方を足の先で占いながら
眠った後に甦り
夜明け前の意気は路上に伝播するだろう

鉄錆色の落葉が
足裏にやさしい
さまざまの音に満ちて風
冬の音だ
立春の気配も見せず
しーん と
昼を行く月の船

ヒーヨ ヒーヨ怪しげなこゑ
空を広げて渡る
河童だ
廃道をゆく
まだ冬のただ中

手をこする と
備長炭の匂がする
熊野の山から切り出した
姥目櫓が見える
紀伊の国田辺の主
備中屋長左衛門が商った
備長炭
気品があってじんわり温もり
昔昔の火鉢の匂だ
また手をこすって歩く
ホロホロホロ ホロホロ
メタセコイアの針の葉が降って
さししゅうなってしまった

河童と並んで考えた
一日中部屋にいて
無理せずに無理すること
言いきかせて
つづきを歩く

廃屋の庭

新しい小さな家が立ち並んだ
細い道
その向かい側に立つ廃屋

まだ新しい家の建つ予定はないのか
庭は荒れたまま
軒先に揺れるロープは
洗濯物を干していた名残りか

色褪せた濡れ縁に
枝を伸ばした 白梅
生き生きと 艶めいて
冷たい風を楽しんでいるような

残された羽

鳩の？
何に気を取られていたのか
一滴の血痕も残さず
塊のような羽だけを残して

誰に？
羽ばたく瞬間もなかったのか
声を出す間も

吹いてきた風にのろのろと
動いていく
無念の思いを引きずって



三浦 逸雄 「来客」 8号（アクリル・紙）2020

八〇歳を過ぎて数年経った。わが国の男の平均寿命が八一歳だそうで、この際自分の死というものを考えておこうと思う。それになるべくなら楽しく、ひとつの事業を思い描くように、ひとつの創造として、死を考えたいという願いをもっている。

死について楽しく考えようとしているうちに、すぐに気付いた。死について考えを進めるということは、今日の生き方を考えるものだということだ。死の具体的方向性を考えると、今日の生き方を決定する。

結論的にいうなら、より充実した実りある「今」を生きることによって、納得した死を迎えられる。つまり「生ききる」ことによって、納得して死ぬることになる。これこそが創造であり、最期の芸なのだと思う。

成人病についてこんな言葉がある。「治らない、治せない、予防できない、すぐに死なない」...ということは、成人病といわれるものは、自然現象であって病気ではない、ということにならないか。われわれがしだいに衰え、機能が低下してゆく、ということは生物である以上当然のことであって、別に嘆くにはあたらない。あわてて医者に駆け込んで「患者」にならなくてもよい。医者はそんなことは百も承知で、何かしら薬を投与してくれる。人は薬をもらわないと不安であり、薬をくれない医者を信頼しない。そこで医者はすぐに薬を出す。しかし薬というのはおおかた毒物であって、体全体にいい薬などないというのが基本の基である。まして老化を治せる薬などあるわけがないのだ。

自然現象である「老化」によって、しだいに体の部分が衰え、かつ劣化してゆく。その先にすべての機能が停止する「死」が控えている。そう考えれば機能低下を素直に受け入れるという態度が必要ではないだろうか。この齢になって数値がすべて基準内に収まるような、ピカピカの健康体などあり得ないのだ。死を納得して迎える準備を、確実に、楽しく、進めてゆくことこそ肝要であろう。

転居通知

謹啓 お元気でお過ごしのことと拝察いたしております。小生このたび転居いたしました。転居先には住所がありません。お訪ねいただく道也没有せん。電話もメールも通じません。これまではいろいろとお世話になりました。数々のご迷惑をお許してください。これからますますお元気で長生きしてください。こんな転居通知を寄越した変わり者のことを、ときには思い出してください。すると転居先でも気づいて歓んでおります。それではサヨナラ。 謹白

この文書は一般的には死亡通知として友人知人に送るものだろうけれど、このような文書を創ってみた。こんな作業がすこぶる愉しいのである。これを葉書に書いて、宛名と住所の表書きも書いておき、家族に投函を託そうと思う。

わたしが最初に就いた能面の師匠が亡くなったとき、仕事場の整理を未亡人から委託された。さっそく仕事場に行って、いつも師匠が座っていた席に座ってみた。そこで師がいつも使っていた道具を手に取り、周囲を見回しているうちに、師匠の気分が乗り移ってきたような雰囲気を感じた。いろいろ細かいところも目に付いてくるうちに、ものに挟まって封筒があることに気付いた。これは何だろうと胸騒ぎに近いものが一瞬かすめて、見ると表書きに「おもかげ」と墨書されていた。なんとなくワクワクしながら中を覗いてみると、女の写真であった。雑誌とか新聞その他から切り抜いたとおぼしい女の写真が一〇枚くらい入っていた。師のお気に入りの女たちのオンパレードだった。これを見てなんと「いじらしい」ことだと微笑ましくなった。いかにも彼らしいなとも思った。大概の男なら似たようなことをやっている。全くしないという人も居るだろうけれど、なんだか味気ないというよりもったいないような気がする。

広辞苑の編集者 ^{しんむらいずる} 新村 出 博士においては、当時の人気女優だった高峰秀子が大のお気に入りであり、大量の写真に囲まれて暮らしていた。そればかりではない。新村博士は積極的に生きる人の本領を発揮しておられた。つまりファンレターを秀子にしばしば送っていたのである。それはあたかも光源氏の恋文のようだった、と秀子書いている。

あるとき同じ京都に住んで付き合いのあった谷崎潤一郎が、秀子を新村邸に連れて行ったことがある。このとき小学校もろくに通っていない秀子は新村出の名を知らず、広辞苑といわれても分からなかった。「コウジエンてなに、料亭のこと？」と尋ねて旦那の松山善三を呆れさせている。新村邸に行ってみると、まず玄関に等身大の写真が立てかけてあった。新村博士が外出先から帰ると、秀子がにこやかに迎えてくれるわけだ。応接間に通されると、そこも秀子の写真が飾ってあり、帰り際に書斎に案内されてみると、なんと彼女の写真が一〇枚も飾ってあったという。まさに恋しい秀子に囲まれて暮らしていたのである。皆が使った広辞苑も、昭和の大女優の癒しと活力の賜物だったことになる。

微笑ましいことではないか。男はみんなこんなものだ。自分の死後誰かに見られて恥ずかしいから今のうちに処分しておきたい、と思いつつ結局のところそのままになってしまうもののようなのだ。というわけで、わたしは処分など考えないことにした。どうだ俺のコレクションを見てくれ、と居直っている。今のところは。

しかしこういうものが、ある事件の証拠品として公にされたことがある。戦後の謎の事件のひとつである「下山事件」においてそんなことがあった。昭和二四年七月六日国鉄総裁の下山定則氏が列車に轢かれて、無慚な死体となって発見された。この事件は自殺によるものとの見方と、殺された後から列車に轢かれたもの、つまり死後轢断という他殺説に分かれた。下山総裁は謹厳実直な人で、その紳士ぶりによって多くの尊敬を集めていた。思いも寄らないことながら、銀行の私物保管庫に「春画」を保管していた。法廷に証拠品として提出され、自殺ならこうしたものは処分するはずだと、他殺説の論者は主張した。「あの真面目な下山氏が！」と思ひも寄らぬ話題を提供してしまった。こんなこともあるのだ。

しかしわたしのような一介の庶民にはそんな心配は無用である。とはいえ多くの男たちはこの問題に頭を悩ませていることだろう。真面目な同胞たちは処分している人も多いかもしれない。安心して欲しい、と小さい声でささやいておこう。そのまま最期まで楽しめばいいのだ。癒しと活

力を貰って、最期のひとときを充実させることこそ肝要だと思う。

死を創造するという壮大なテーマを掲げながら、このような話になってしまったのも、風狂の徒である自分らしいかなと思う。このテーマで今後折々考えてゆきたい。（了）

私がクライミングに熱を上げる少し前、一九九一年にバブル経済の崩壊が始まる。金融緩和政策によって流れた資金で不動産や株価は信じられないくらいの値上がりが続けていたが、強引な地上げが横行するなどの社会問題が頻発したため、今度は政府が行き過ぎた金融緩和政策を転換することとなり、バブルは急速に萎んでいった。公定歩合は引き上げられ、また消費税が初めて導入されたのもこの時だ。三%から始まった消費税は二〇二〇年の現在、十%まで引き上げられ、私のような一庶民の生活を圧迫している。

バブルは崩壊してしまったとはいえ、今に比べれば遙かに生活に余裕はあった。山歩きからクライミングに少しずつシフトしていった私は、たまにガイドによるクライミング教室に参加すると共に、神奈川県の日沢ににあった登山訓練所に月一のペースで通っていた。場所が日沢だけあって、暖かい時期はもっぱら沢登り（シャワークライミング）の講習が多かった。宿泊施設もあるので土曜日の午後に訓練所に入り、近くの石垣にロープを張って簡単なクライミングの講習を受け、施設の管理人が作ってくださった夕食を取り、そのあと持ち寄った酒で大宴会、泊まるというのが通常のパターンとなっていた。翌日の日曜日の早朝から、前日の酒が抜けないまま日沢山塊にある沢を遡っていく。沢登りに必要なウェアやシューズなども、値段に躊躇することなくお気軽に買っていた時代だ。それにしても日本の山の岩は脆い。その沢登り教室では大抵、いや全くといっていいだろう、毎回落石によるけが人が出た。訓練所の講習では起きることはなかったが、沢登り中の事故による死者も出ているようだ。とはいえ美しい滝の流れや水音、岩はだにひっそりと咲くイワタバコの紫など、沢登りでなければ味わうことのできない風景がそこにはあった。

登山訓練所の講師は神奈川県内の山岳会が持ち回りで行っていた。豪傑というか、いかにも「山男」というオーラを出している人たちばかりだった。秋が過ぎると冬山訓練の季節がやってくる。初めての冬山は富士山六合目附近での滑落防止訓練だった。一月も後半になった頃だと思うが、富士吉田駅に夜九時集合。講師の運転する数台の車に乗り込み、馬返しに向かう。冬場、富士スカイラインは閉鎖されていて、車で五合目まで行くことはできない。そう、私たちは麓から歩いて五合目に向かうのであった。富士山吉田口登山道といわれていて、スカイラインができる前に富士登山をしたことのある人なら、このルートを知っていることだろう。冬山用のプラスチックブーツにアイゼンを取りつけ、ヘッドランプの明かりを頼りに登っていく。行けども行けども、何度、角を曲がっても景色は変わらない。足元の雪と目の前に広がる暗闇……。この頃はフリークライミングにも手を出し始めていたため、指にかかる負担を軽減しようと五キロのダイエットに突入していたのだった。私のエネルギーもいよいよ尽き果て、もはや行き倒れるかと思った次の瞬間、やっと山小屋が姿を現した。余裕で登り切りマッタリしている講師陣たちから「軽く一杯」とお誘いを受けたが、こちらはフラフラである。石のように重く氷のように冷たい布団に潜り込んで、早々に眠りの世界へと向かっていった。

翌日はいよいよ六合目附近での滑落防止訓練である。が、外は猛吹雪。訓練どころか本当に滑落

しかねないということで中止となってしまった。やることがない……。いや、やることはあったのだ。それは宴会。私は一升瓶を担いで五合目までやってきていたのである。全くアホである。ストーブがガンガン燃え盛る中、大宴会が始まった。他のメンバーたちも酒好きばかりである。持ち寄った酒を呑みまくる、呑みまくる。エネルギーを注入した私はすっかり元気を取り戻し、翌日無事に馬返しまで降りてくることができた。何しに行ったのかって？ 雪の富士山でどんちゃん騒ぎをしに、としか……。

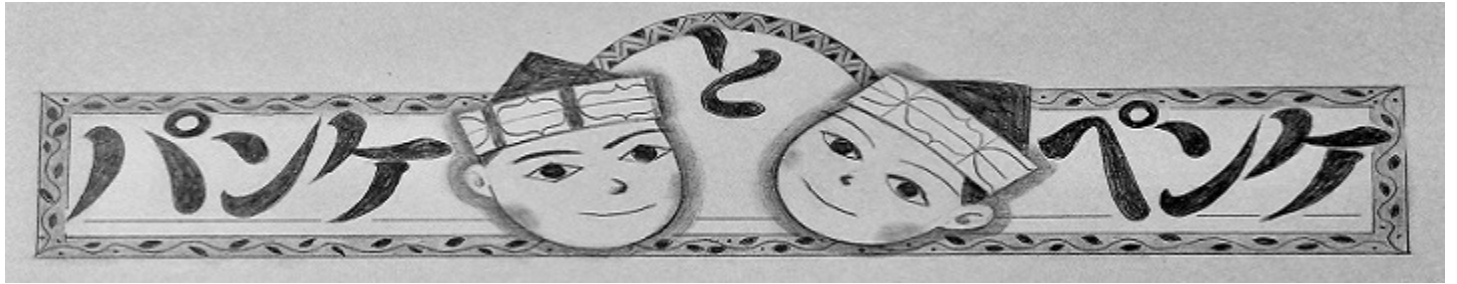
冬山訓練のメは三月の谷川岳の登山だった。といっても頂上に行くのが目的ではなく、途中の適当な場所で雪洞を掘って泊ってみるというのが訓練の趣旨だった。小柄な私にとってはその「適当な場所」に辿り着くまでが大変で、小雪の舞う中、胸まである雪を掻き分けようとしても雪の中を泳いでいるというか、溺れているというか、一向に前に進まない。背中のザックにはもちろん忘れちゃならない一升瓶が仕込んである。重い……。やっとな雪深い斜面の「適当な場所」に着き、雪洞づくりが始まる。三時間はかかっただろうか。雪洞内部が整うと鍋を作り、当然のことながら宴会開始である。五斑くらいのチームに分かれていたから、一升瓶を片手にそれぞれの鍋を偵察がてら陣中見舞いなどしたりして、まあ盛り上がること、盛り上がること。雪洞は作るのが大変だが、冬山にテントを張るよりもずっと暖かい。宴会も無事に終わり、持参のシェラフ（寝袋）に身を包んで、コトリと眠りについた。

翌日目覚めると、外はまたしても猛吹雪である。荷物をまとめて早々に下山することになった。土合駅近くの温泉施設で汗を流し、電車で東京へと向かう。高崎付近は谷川の吹雪が嘘のように、うららかな春だ。隣り合わせた見知らぬ初老の婦人が、お手製のぼた餅を「どうぞ遠慮しないでお食べなさい」と差し出した。ああ、お彼岸だったのか。うららかなはずである。（続く）

参考文献

日本の未来を応援するブログ。「バブル崩壊の原因」

<http://economy-and-assetformation.com/2019/11/06/the-collapse-of-the-bubble-economy>



パンケとペンケ（十七）

パンケちゃん、ペンケちゃんが13歳の秋はたくさんのチェブがとれ、山々は錦に染まり、やがて雪におおわれた。でも3月にはしだいに雪も溶けなんとなく春の気配。

ストーブを焚きながら布団にもぐっていて、ふと寝返りをうった時ボンヤリしている僕の目の前に、一転してパツと明るいタンポポの野が広がった。

また春が来たんだ。

♪山に来た 里に来た 野にも～来た～

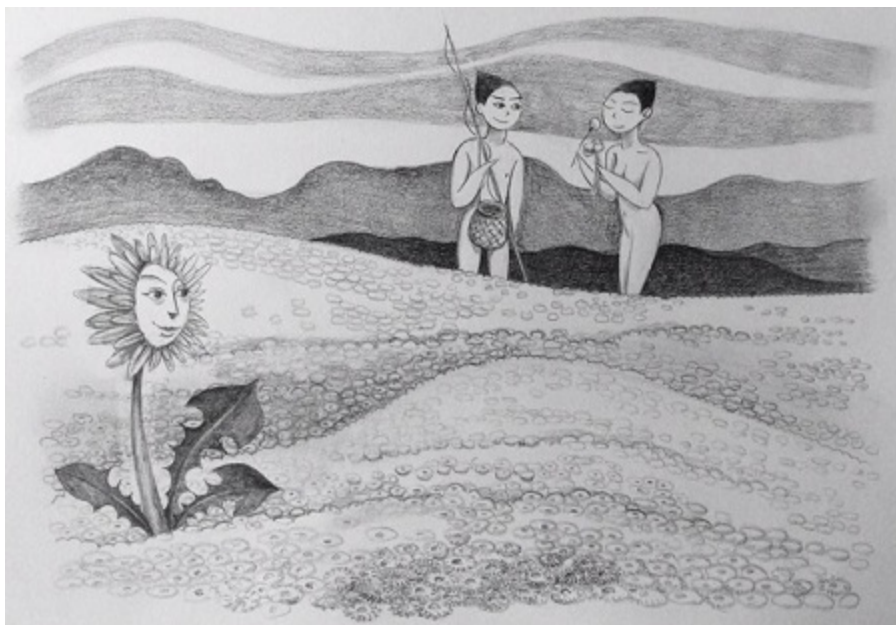
一面のタンポポの野で、パンケちゃん、ペンケちゃんは何やら語りあっている。ふたりは今年誕生日が来れば14歳になる。でも妖精は仲が良くても恋はしない。人間に似て生まれて来たけど肉体はないからね。

余計なことは考えない。

おたがいの里の守り神だし、会っては里の様子を語りあう。

「パンケの里ではね、このごろお年よが増えちゃってね。赤ちゃんがあまり生まれてこないんだよね」「ペンケの里も同じよ」・・・少子高齢化が進んでいるらしい。

でも、ふたりは元気。ちょっと大人っぽくなったかな。



パンケとペンケ（十八）

野山に若葉が萌えるころ、玄関を開けるとウサル川のせせらぎと小鳥たちの大合唱が耳に飛びこんで来る。

山々のヒダからは朝霧がわき立ち空へのぼり雲となる。

朝のお茶を飲みながら、籐のゆったりチェアでウトウト。

パンケちゃんの声がした。

「おじさん、今日ペンケの里の酋長さんの大きなチセを見に行かない？」

「チセの中、見れるの？」

「見れるよ。僕たちは時々入って遊ぶよ」

酋長のチセはさすがに大きい。

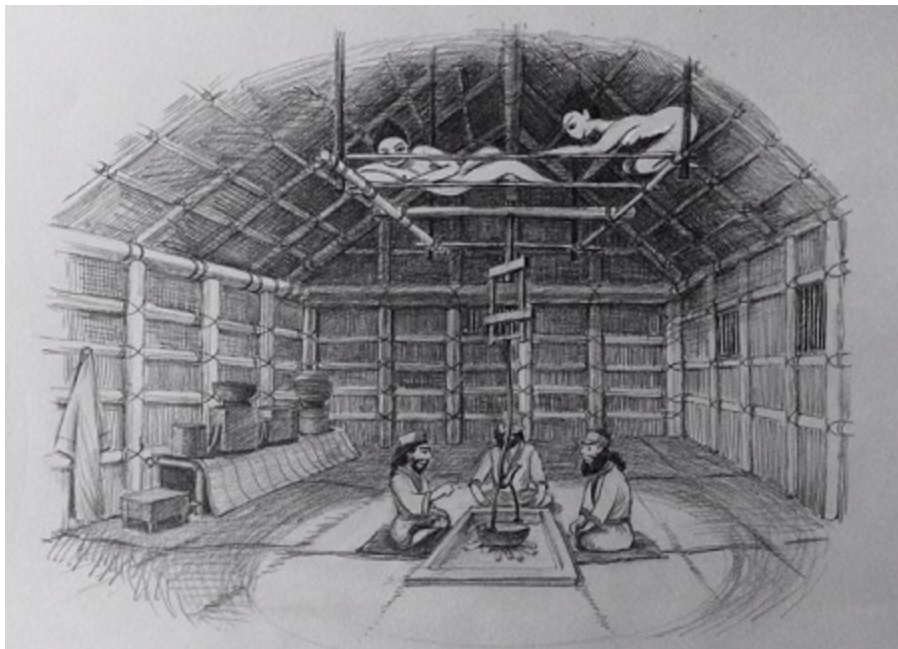
お客さんが来ているようだ。パンケちゃん、ペンケちゃんは天井の薄暗がりでは部屋の様子を見ている。

あとで「大きなチセだねえ。宝物もいっぱい飾ってあったね」と話しかけると・・・

「おじさん、酋長さんたち何を話していたか分かった？」とパンケちゃん。

「話までは聞こえなかったな」と答えると「あのお客さんは新しくこの里に来た人でね、チェブを専門的にとる人みたい。酋長さんにね、それをあちこち持って行って宝物をいっぱい手に入れようって言ってたよ」

そんなことしたら、里のみんなが困るでしょう・・・と言うと「そうだけど、酋長さんも何となく、そうだねえなんて言っていた」（つづく）



第五章 情熱における想像力

これまで述べて来たことは情熱の身体であって、魂のことではありません。情熱の魂とは、思い出、推測、予見という輝かしい全ての証拠を伴った偽りの判断であり、熱狂者が不眠とか期待の中で率直に歩き回ります。そして想像力のこの働きは最大の人間の禍を生み出し、既に発熱とか抑制された痙攣とか妨げられた行動の素描とは別のものです。幾つもの影が微笑したり、脅す様にしたり、悲しげであったりして、駆けつけて、逃げ出して、戻って来ます。幸福であったり、不幸であったりした海や山や町の場所が垣間見られます。この心象も又、まさに何ものかであります。しかし、この喚起力はそれでもその価値を評価しなければなりません。従ってその中で私たちは芸術家になるのでしょうか。私たちは遠くにあるものとか最早存在しないものを、熱狂的な夢の中で熟視する力を持っているのでしょうか。熱狂家は持っていると言いますが、私たちは既に熱狂家が不正確な証人であることに気付きました。彼は見ていると思い、見たと思いがっています。生命を脅かす処まで行く余りに現実的な混乱が、それを十分に証明しています。彼の語調は私を感動させて、彼が見ているものを私も又見ていると思わせるかも知れません。しかし冷静に詳しく調べてみましょう。

私が雲とか煙とか壁の割れ目を前にして両目を開けて夢想する時、人の顔とかあるいは動いたり姿勢を取っていたりする人物を見ることがあります。それから、それを探したり思い出したりすることも良くあります。しかし、少なくとも一分間程、断固とした注意力で見ると、それらの形は決して変化しないことが分かります。それらは煙であり雲であり割れ目であって、それ以上のものではありません。その様にして判断、情動、身振り、身体の出だしは恐らくどんな心象も生み出します。どんな対象も、取分けぼんやりした対象は最初の瞬間が曖昧であり、目や身体の動きがあらゆる事物を走らせたり踊らせたりして、色々な光の加減で刻一刻と姿を変えて行くことに十分注意しましょう。瞬間のこの混沌の中で私が決して見ることの出来ないものは何でしょうか。情動の自己満足や悲劇的な一種の遊びの様なものによる以外に、感動的なこれらの幻想を再発見しないことにも又注意しましょう。

数々の対象が既知のものとなって馴染んで来て曖昧でなくなって来ると、夢想はその時横を向いて仕舞い、さ迷う視線は脇にある心象を探しに行きますが、何時も私たちの背後にある様なものです。幻想のイメージは弱いと時々言われますが、それは間違った言い方です。今日では灰燼に帰して廃墟となった私の田舎の家も、私は今でも思い出せると言いますが、その家を見るには注意深く見詰めなければならない様な弱いイメージではありませんし、ぼんやりしたものでもありません。その反対に注意力はその家を消して仕舞います。しかし或る身振りや動きや短い衝動は私の健全な視線の外に、その家を突然に見せてくれますが、それだけのことです。私には見たという思い出しかありません。そして延長してそれを確信する生き生きとした情操の感情を理解して下さい。その様にしてもう一度この思い出は、身体に責任が降りかかって来ます。それ

から話された判断が決して援助しないものであるとするなら、自然に怖いものになるとも言って置きましょう。どんな記憶もそこから出発する時はもう一度点検されなければならないでしょうし、取分け私たちに良く生まれる間違いはご存知の様に、私たちがそれでも決して見なかったと判断する対象を見分けなければならないでしょう。

私が夢を見た時に、見たものは何であるのかを知ることが今は残されています。しかし夢をもう一度見なければならないでしょうから、私は何も知ることが出来ません。その時に私は再び騙されることになるに違いありません。私はそれを我慢します。そこからはまさに今の現実の感動を把握します。その外のものは今では夢想でしかなく、どんな夢想も同じく消え失せるものです。私は話し、生き生きしていて、私が見たと思っているものをもう一度見たいと思います。それから私も気付かないで、私の目はきょろきょろしてこの世の中に曖昧な何らかの形を探しますが、それは私が一瞬でも信じることが出来る何らかの形です。これらの考察によって私は予言者や霊媒者とは何であるのかを十分に見抜きますし、彼の言うことがどんなものであっても、私が信じることは決してありません。予言者に芸術家は誰もおりませんし、詩にも雄弁にも同じことを私は言います。そして私が予言者と呼ぶ者とは、諸事物が情熱に沿って営む結果に従って判断する習慣を非常に持っていて、まさに怖ければ何らかの怖い対象を見たことを決して疑わず、恋愛に興奮すれば愛する目を見たのを決して疑わず、以下同様の者です。予言者とは一番沢山見ていると言う者ですが、恐らく一番見ていない者なのです。というのも私は、狂人が沢山の諸事物を見ているとは決して信じないからです。私は、狂人が現存する目で言える諸事物によって説明し得る以上の多くのことを感受しているのであると、単に思うだけです。そして狂人と同じに予言者も全く芸術家ではないと私は言います。何故なら諸事物の中で、現実の完成された作品への要求というものが無いからです。容易く小説を想像する者は、まともなものを決して書きません。狂人は他の人々が決して見ていないものも多く見ていると信じますけれども、全然芸術家ではありません。そして彼の誤りとは、根拠の無いイマージュに沿って彼の行為を規制したがることです。その代わりに芸術家は全く反対です。芸術家は創るものに従って自分のイマージュを規制している様に見えます。私は芸術家の指に基づいて生まれる対象に従って理解しますし、あるいは規制された歌とか、節度のある朗読に従って理解します。小屋を想像したいと思う人の本来的な自然の動きとは、小屋を造ることです。小屋が姿を現すためには他に方法は決してありませんし、歌を現すのも歌うことであるのと同じです。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとう のりお

一九五〇年、新潟県生まれ。高校卒業後、絵の道に進みたく、反骨、反権力、ユニセックスの雄・長沢節主宰の「セツ・モードセミナー」に通う。四年で卒業後、五年間位エセヒッピー的なぐうたらではあるが、充実した生活を送り、色々あった後、印刷会「待望社」に入社。仕事を通じて、日本詩人クラブ理事長も務めた笈楨二氏と知り合い、彼が発行する動物に関する小冊子に短いエッセイを書くようになる。笈氏亡き後の二〇〇九年より、詩誌「山脈」のメンバーとなり、詩を書くようになる。尊敬する詩人は、笈楨二、ジョン・レノン、村上昭夫。日本詩人クラブ会員。

宿谷 志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツアルトの作品。

神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんで来て、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 9 7 1・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永 たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回遊」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二回横浜詩人会賞受賞）

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつゞら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロボリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風 狂（ふうきょう）第67号

2020年2月19日 発行

<http://p.booklog.jp/book/129771>

編集：風狂の会（担当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/129771>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社